

令和八年度 入学試験問題(推薦B)

小論文(その一)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

意識が幅を利かせる脳化社会は、違うことを嫌います。日常は違いに満ちていますが、意識に振り回される
と日常が脳へ追いやられる。意識は「同じ」しか扱えないからです。

同じの最たるものは数字でしょう。物事を数字にすればするほど、世界はどんどん単純化する。人間も数字
にしたほうが便利です。番号一つあれば、本人は必要ありません。

数年前、銀行に行って手続きをしようとしたら、本人確認の書類提出を求められたことがありました。私は
運転免許を持っていないし、病院に來たわけじゃないから健康保険証も持っていませんでした。そうしたらそ
の銀行員が「困りましたね。わかっているんですけどね」と言う。よく行く地元の銀行ですから、その人も私本
人だとわかっているんです。ここにいるのは間違いなく養老孟司なのに、なぜ養老孟司と認識されないのか。
いったい「本人」って何でしょうか。

それから数年して答えが出ました。本人は、いまや「ノイズ」です。本人の情報さえあればいいんです。
本人確認の書類をロボットが持ってきたらどうするのか。たぶん、それでもいいんでしょう。生身の顔色や
機嫌、声、匂いなど、すべてが感覚所与、つまりノイズなのです。

医療現場でも、肉体を持った患者さんがどこかに行ってしまうと、検査の結果だけが事実になってしまった。
正常値から外れた数値を、正常値に戻すことだけが医者の仕事になっている。その仕事で、その患者さんにと
のくらい関係があるのかというと、実はもうほとんど関係ないわけです。

私は東大の医学部にいたので、患者さんを紹介することがありました。治療が終わった患者さんが、お礼を
言いに来る。そこで何を言うかというと、「担当の先生は、顔も見えないんです。カルテを見て、パソコンを見
ているだけで、手も触らない」。まさに「統計」だけが「事実」で、本人がいなくなっているのです。

会社で同じ部屋で働いているのに、上司や同僚にメールを送り付けるのも、ノイズを排除したいからです。
人間もコンピュータに近づいてしまっているから、ノイズが入っていると処理しきれない。だから生身の人間
とつき合うのが苦手になっていく。

(養老孟司『ものがわかれるということ』祥伝社より)

令和八年度 入学試験問題(推薦B)

小論文(その二)

問一 筆者が述べている「脳化社会」とはどのようなことを意味しているか、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 あなたは「脳化社会」について、どのように考えますか。あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で
述べなさい。